

アルノ・グリューン著 村椿嘉信訳

5版!

従順という心の病い

私たちはすでに従順になっている

Arno Gruen, "Wider den Gehorsam", Klett-Cotta, Stuttgart. 2014



Arno Gruen (26. Mai 1923 in Berlin; † 20. Oktober 2015 in Zürich)

2025.4.20 出来予定

精神科医・平安女学院大学名誉教授

“服従、が”思考停止、”となるとき 工藤信夫氏・評

“従順、が良しとされる文化と、信仰の世界に再考を迫る、すぐれた洞察の書である。…… 中略 ……

例えば母親から虐待されて育った子供は、自分を母親と同一視することによって、母親に対する不安を解消し、自分自身に対する屈辱感や劣等感を、さらに弱い立場の者を攻撃して、その不安を解消しようとするという。そしてこの機制は今日のグローバル化する時代の暴力に符号するともいう。というのもそれは“愛と共感、”いたわり、による連帯を土台とするのではなく、強権やまちがった権威、権力で人を脅し、操作をしようとするからである。この点現代社会は、人々に“適応、を強要することによって、安定を計ろうとするがそれは“見せかけの適応、従順、でるが故に、隠された病理である。その根底にはその人自身の自己否定、自己嫌悪、劣等感があるからである。 長い間、日本の教会と信徒の心の病理に注目してきた評者にすれば“従順、を良しとしてきた日本人の信仰心には、多分に“服従、という美名のもとに“思考停止、という要素が入り込んでおり、この力は足並みのそろわないものを排除して“均一化、を求める日本の教会が思い浮かんでくる。

日本人の信仰を吟味する、再生の書と言ってよい好著である。(クリスチャン新聞 2017.02.26号より)

主な目次

従順の問題点
子どもの成長と従順
従順の原因
誤ったアイデンティティと破壊行為

権威と従順
従順から逃れる道
国家論—従順の権力構造
従順—私たちの文化の基盤と病理
従順とのたたかい

謝辞
注
人名索引

【既刊】私は戦争のない世界を望む

アルノ・グリューン [著] 村椿嘉信・松田眞理子 [訳]

富田正樹氏・評 「なぜ戦争が起こるのか」「どうすれば戦争を避けることができるか」 戦争や暴力を容認する文化や人間の深層にあるものを心理学的に分析し、「なぜ戦争を企てる政治家が現れるのか」、また「なぜ自分は自由で民主的だと思っている一般市民が戦争を企てる野心家を指示してしまうのか」について説明し、戦争をやめるためにはどうすればいいかを考えている本。(とみた・まさき = 日本基督教団徳島北教会牧師、同志社香里中学校高等学校聖書科教諭)

46 変型判・196 頁・定価 900 円 + 税
ISBN978-4-946565-83-0 C0036



勇気、心、開かれた思考を持って、従順とたたかう

従順は破壊的である。従順は、思考を閉じ込み、現実を否定する。現実の全体を、権力者のその場限りの短絡的な視点を反映するだけのものに制約したり、閉ったりすることはできない。よりよい世界は、失われた楽園を再現しようとするファンタジーではない (アルノ・グリューン)

YOBEL, Inc.
定価 (本体 800 円 + 税)

46 判変形・160 頁・800 円 (税別)
ISBN978-4-907486-42-6 C0011